



長計策定委員のみなさまへ

青森県民の憂慮

～推進と反対という立場を超えて～ 今、国民的な議論を！

2004年10月21日

グリーンピース・ジャパン

核問題担当 鈴木かずえ

野川温子

昨日10月20日、青森グランドホテルを会場に原子力委員会の主催で「長計（原子力開発利用長期計画）へのご意見を聴く会」（第17回）が開催されました。原子力委員や策定会議の委員数名が青森へ来て県民の意見を聞くのは初めてでしたが、会場からは、もっと早く開くべきであった、という意見が多く聞かれました。また県民を代表して発言された6名の方のうち推進派といわれている発言者から、「県民の一人として、廃棄物の処分、最終処分場をきちんと決めて頂きたい。それがあるまでは再処理してもよいかは疑問。そのご努力を原子力委員会にはお願いしたい」

「安全協定は絶対必要。地元から見ても、安全協定というものをしっかりと、操業するようになって、ペナルティとかそういうものをきちっとかけて頂けるように、そういう協定を、というか、提案を作っていたいただきたいというのは事実。」という主旨の意見がこの場で出されました。

グリーンピース・ジャパンでは、この「ご意見を聴く会」の青森開催を歓迎すると共に、この場での発言の中から、普段の策定会議ではあまり取り上げられる機会のない、核燃料サイクルへの県民の不安や憂慮の声を抜粋してまとめましたので、ここにご報告いたします。

また今回の会の開催は、青森県民から原子力委員会への強い働きかけがあって実現したことをここに記し、策定委員のみなさまにおかれましては、ここにまとめられた意見をしっかりと受け止めていただき、長計の議論に生かしていただきますようお願いいたします。

また、今回は青森県民の声を聴く大変重要な機会でしたが、核燃料サイクルの4つのシナ

リオ（1. 全量再処理 2. 一部を再処理 3. 全量を直接処分 4. 当面、貯蔵し、将来政策決定をする）について、安全性・エネルギーセキュリティ・環境・経済性・核不拡散・技術的成立・社会受容性・他の選択肢・政策変更にもなう課題・海外の動向の10項目を策定会議として評価し、さらに、国民の意見を求める場を作るよう求めます。

以下、「ご意見を聴く会」に出された意見のまとめ

#### 放射能について

- 国策だから大丈夫とも言われるのですが、放射能の寿命を考えると怪しい物です。プルトニウム239の半減期は24000年。今から24000年前は、石器時代なのです。これから24000年先まで、国が管理してくれるなんて、信じろという方が無理ではないですか？

#### 県民の不安感

- 放射能くさい野菜を買うものがあるのか。自分は農家として、青森県から脱出するべきかどうかの、判断をしなければならない
- 北村知事が核燃の受け入れ表明をされてから19年を経てなお、県民は安心感を持っていないのです。放射能の被害はすぐには現れないと聞いております。この会場にいる私たちが死んだ後の、これから先の若い世代が被害を受けるのです。少なくとも、これからの青森県を担っていく子どもたちが、十分納得した上で、進めていって欲しいと願っています。
- プラスとマイナスがあるのを正直に言ってほしいと思う。  
言わないから、余計な不信をうむ。だから農家として、（核燃料サイクルに対して）不安。

#### 安全性とは？

- 米軍ミサワ基地があるのを知らなかったのではないかな。  
上から落ちてくるミサイルはどうしようもない。六ヶ所は立地に適さないとするべきであった。
- 人間が生きていくためには、農業、漁業、食料を生産していくことが一番大切。自然環境がよくなければ、良い食糧は生産されない。原発や核燃によって汚染されれば、とれる作物は安全性を損ねる物しかとれなければ、売れなくなる。風評被害も当然出てくる、という大変なことになる。核燃サイクルを進めていく、安全協定を結ぶということであれば、また国策であるというけれども、本当に法的に拘束のある、風評被害も事故の補償も、保証人としてしっかりと責任をとってほしい。

#### まだ議論を継続すべき

●最終処分場も受け入れがみつからない

本県は最終処分場にならないという以上、最終処分場を見つけてから再処理というのが流れではないか。

●国民の議論が必要。千円あがっても、風力にしたほうがよいという意見があるかもしれない。

●消費者は選ぶ権利はある。農業者私たちは選ぶ権利がない。やるべきことはたくさんあると思う。ただ、再処理については、いまやる必要性はない。

●長計計画の議論、原子力をどうするのかを議論して、最後に核燃サイクルを議論するべき。もんじゅが動くと、90年代に動くといったのは原子力委員会。10年後、20後には六ヶ所にもゴミだけが残る。だから、基本的な議論を先にして、それから決めるべき。

「アンケートがあれば、会場で意見を述べる機会が当たらなくても、誰もがそれぞれ意見を述べられる。手がたくさん上がっている。集中立地の地域には何辺でも足を運んで、(議論を)やるべきです。」という会場からの意見に対して、原子力委員会の木元委員は、「意見はいつでも受け付けます。メールでも、ファックスでも、ペーパーに出して送ってください。」と応えました。

発言者の一人の4人の子供を持つ母親という方から、質問が投げかけられました。「是非、原子力委員の方にお伺いしたいのですが、気の遠くなるような長い時間の単位で考えなければならぬ原子力の長期計画とは、一体何年先まで見据えた物なのでしょうか？千年ですか？万年ですか？青森の子どもたちは、将来にわたって、何の心配も不安もなく、暮らしていけるのでしょうか？青森県に生まれたことを誇っていけるのでしょうか？」この質問に対して、納得のいく回答がなされてから、核燃料サイクル政策への結論を出すことを求めます。

以上